

終末の夜にヒトは笑い

A L C アリス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サイババルゾンビアクション

とある県とある町、電車も高速も行き交う大きな町

そこに一人の男が到着した

彼は何物で、何を成すのか

目覚めたとき、自身の記憶は無く、有るのは戦闘技能に様々な工作技術

唯一の所持物は『人造の心』

道標を失った彼は彼女に出会い

彼女に動かされ、彼も

人々は歩き始める

ハーメルン初投稿です

目次

敗者か勝者 俺は・私は	1
ボクは思い出の敗者 — ニンフはみずぞ	
ここにいない	16

敗者か勝者 俺は・私は

今は夕暮れ、街並みは日本の発展した都市部のどこにでもある駅前風景
賑やかな人並み

一人の男性が駅前東口からこの街の『中央病院』に向かい歩いてた

その美貌は男女ともに多くの人々が行き交う街中ではとても目立っており
時折”男性”から声を掛けられれば二、三事言葉を交わし軽くあしらひ
姿は携帯の写真でネット上に拡散されていることだろう

彼はにこやかな表情で舞台の上から見るじゃがいものように人々を楽しんでいた

もうすぐ、駅前アーケード街の出口

周囲に人は多い、寧ろ堂々と追っつけてきている

そこには『彼の知り合い』の一人の白衣の男性が警察官五人と待機していた
此方が声を掛ける前に

よう、と白衣の男性は手を振った

「キミのコードネームは？」

『レイセン』

「レイセン…歓迎しよう『存在しない町』へようこそ」

周囲の人々は何かの取材だと認識し携帯を操作している

合流したそれぞれ二台の警察車両に乗り込むと

「ああ、出してくれ」

掛声で発進した車内で彼は尋ねる

「あー、あれはダミーのネットだよ。元から存在しない」

「存在する外の社会の情報を企業から買ってその人に似たのを造ってるだけさ」

「ああ、平日とは云え病院まで車が混む。眠っていると良い」

彼はそのまま意識を手放した

轟音と金属の鈍いひしやげる音

零泉は自分が事故に遭ったのだと確認する。が。

再び彼が再起動するまでに周囲は変化していた

両手のカテーテルを引きはがし、右手で車の天地返しの天井を抑え

自身の身体に薬物投与していた全体を確保していた固定座席を取り外し
地に落ちた彼は歪みきったドアを文字通り蹴破る

太陽が昇っている。時刻は10時

周囲の街並みは暴動か何かに荒らされたように道端に草が生い茂り、降ろされていた
も錆びつき、シャツター、ガラスや紙片などの破片がまき散らされ

商店街は何処もかしこもボロボロで、何年経ったか判別が付かない程であった
それ程までに町は荒れ放題だった

「研究員、並びに関係者死亡。当个体への衛星、通信とのリンク隔絶されました」
人が聞いたら何処か優しい親しみを感じる声で機械の様にレイセンは一人語る

「緊急時適用、当機は個別に判断、感情プロトコル、『模範的庇護者』」

棒立ちだった彼

レイセンは『彼女』のパターンで動く

途端。中性的な容姿の彼は。細かな仕草から人間的な女性にしか見えなくなつた

彼女は猫のようにしなやかに伸びをすると

「困るねー。周辺の地理は知らないし」

腕を組むと首をかしげる

歩き続け、商店街のアーケードを抜ける

「『学校』から自身の情報はわかんないし」

もうそろそろ外食チェーン店舗と大型住宅地の並ぶ大通りエリアだ

「『企業』の契約店でもあれば武装できるんだけどなあ…」

ん？とレイセンは開けた場所に一つの大形店舗を見つける
ニヤつとニヒルに笑う

「にひひつ。ここはひとつ、本物にまぎれるか」

肥満気味の男はライフルスコープを覗いていた

「けけけけつ、一匹撃破あ…げーっぶ」

プラスチック製の弾が『ヒトだった者』の頭部に直撃し倒れた

「飽きたエサで釣れるなんて、なんて便利ーついづぶくぶづぶ」

肥満気味の男は報いを受けたのだろう

首を鉄の切れ端で搔つ切られて血泡を吹き声も呼吸も出来ず

錆びついた鉄の鈍い切れ目に苦しんで死んだ

「ふふん、ボクの腕も中々捨てたものじゃないようだねえ」

そう言いながらレイセンは男の頭を何度もバットやコンクリート片で

無機質な目で叩き潰す

「ふいー証拠、証拠」

灰皿に置いてあった自身のタバコを頬に押し付けると

常人らしく声を上げる

「キヤアアア！いやあー！」

「ぼぐつ、正気を失い数度」

死体を見下げる

「よいしょ、これはおもたーい」

ふざけた様子で先程のコンクリート片を手に重そうに持つ
血だまりに腰を倒す

「大丈夫!？」

女性、それも学生がドアを押し出てくる

「ひうつ！」

手のそれを取り落とす

彼女は近郊の食料品店に食糧を確保しに来ていた

「あの日から人は見かけないし…」

入口の足元のガラス片を踏み過ぎないように注意して独り言を喋っている女性
といってもまだ学生の域を超えていない若者だ

すっかり慣れてしまった『あー』だの『うー』だのという。うめき声。

『ヒトだった者』

あの平日、通学途中のバスの上で携帯から存在を確認した。

その後もネット上で噂は広がり

ネットが切れるその時まで頻繁に情報交流は行われていた

人を喰らい、噛まれた者は彼らと同じ動く腐った死体に姿を変える

足は遅い、腐っているから自壊することもある

弱点は頭と首、胴体は効きにくい

攻撃を加え、重ねれば胴体に対する打撃でも倒せる
火を嫌う

二酸化炭素に寄る

それらに注意すればなんてことはない

缶詰を漁っているときだった

「キヤーー!!イヤー……」

女の子の声!屋上!

基本一階の建物、屋上は看板と大型ファンしかない

経験から従業員用裏口に急ぐ

目で見えないことは判る

だが狭い通路はとても危険

なので『ヒトだった者』の横からの飛び出しを防ぐために

ハエを追い払うようにタオルを巻いた腕を振り回しながら走る

階段は直ぐに見つかった、二階へと駆け上がりドアを開くと

頭のない死体の血だまりにへたり、と茫然としている女の子だった

「大丈夫か……？」

「あう、あうあう……あう……」

その子に近づき、顔を見る

体が震えて口がかみ合っていない、目も焦点が合っていない…見惚れるくらい可愛い顔
だけど

初日の方に見たこうなったらあたしはちよつと苦手なタイプだ

「これは…！」

ヤケドの跡、白くてきれいな肌に赤く残っている

「…ヒトデナシだったんだな…」

近くには異臭を放つ動物小屋のようなものがあった

駐車場の”たくさんの死体”といい『そういうこと』をしていたんだろう

「危なかったが、もう大丈夫だぞ」

この子の『制服』はあたしの”住んでいたところ”の高校と同じだ
身体を抱き寄せる。撫でてやる

その子は大声で泣いた

私もつられて生きてくれてありがとう、と大声で泣いた

食料品店からあたしより小柄なその子を食糧を積んだカートに載せてお買い上げした

「ちよつと、まつてて、ねっ」

彼女がドボドボとタンクから流す液体は…

「がそ。」

「そうだよ、このままじゃかわいそうだからね」

腐ったお惣菜を電子レンジに入れて……
ちよつとした仕掛けで3分

買い物客だった人たちも、可愛そうな子達もみんな

「ひ?」

「炎、だねえ……あつたかい?」

「う」

ニコニコと笑顔で私は、私達はたき火を上げる食料品店の敷地を後にした

国道を下がって行けば住宅街、そこを抜ければ拠点だ

ボクは思い出の敗者　―ニンフはみずぞこにいざない

1

白い月が薄く人工の光のなくなつた街を照らしている

もちろん、彼の下にも

「まったく、先程までの騒ぎが嘘のようだ…」

白衣の男性が筒状の金属製の何かを押しながら一人廃墟となった病院玄関ホールを進む

其処ら中に包帯や血で塗れた担架、沢山の何かと争った形跡

白衣の男性は監視カメラに向かい左耳元のイヤホンマイクに接触しながら何処かに語り掛けている

「調整係員だ、当施設の巡回予定に入っている筈だが」

『確認シマシタ、医師ノ到着ヲ歓迎イタシマス。』

「() 苦勞」

病院システムの確認が取れ

全高5メートルの六足の『軍事拠点攻勢防衛ドロイド』が一基

光学迷彩で偽装し、崩壊していた壁面から現れる

「『弓矢』の最終段階の時間稼ぎにはなるな…」

軍人位しかお目見えすることのない機能美と合理性を兼ね備えた巨大ドロイド話には聞いていた彼の同僚の作品に”類似している”のには驚いたが

白衣の男性は誘導灯のガイドに従いエレベーターに搭乗し階下へと降っていく

同時刻

丘に聳える巨塔の病院の麓そこに

異形の女子高生がそこにいた

黒いセーラー服をしたたる血に紅く染め

拳銃弾使用の短機関銃と牛刀のような刃渡り2メートルの巨大な刃物を片手に持ち

何より、月光に煌めく黒髪、その妖艶な貌

神に愛されし美貌であつた

「はあ、血の跡はここまで、更に抵抗は激しくなるわね」

甘い声で

ため息一つ漏らす

『名無ノ丘中央総合病院』

看板の前には真つ二つの装甲車二台に無数の機械の残骸と頸のない重武装の兵士の遺体が転がっていた

彼女は歩き出す。もちろん、この要塞の目標物の為だ

【地下29階 『第三隔離施術室』】

到着後三時間五十分

一人の検体の人物が数多の半透明な糸の様な細い機械腕により手術は操作され腹部に何か機器を埋め込まれている

それを施術室の術式は殆どオートだが管制室に待機している白衣の調整員は

『最終チェック…ヲ始メマス、近隣ノ…関係者各員ハ嚴重ナ防護体制ニ入ツテクダサイ』

「39%…動力炉試験始動開始…」

「よし、行けるぞ…！」

彼は最後のチャンスである被験者に賭けた

「…残念、ここで終わり」

だが、無情にも“彼女”が到着してしまったようだ

「ようこそ、『企業』の最深部へ」

たった一人のテロリスト ……「レイセン」

大振りに手を振り、白衣の男性はゆっくりと振り返り歓迎するよ、と告げる

「このコーヒーくらいは飲ませてもらっても？」

管制室の操作盤の上に置かれた赤いマグカップを右手で持ち上げる

「いいえ、聞きたいことはたくさんあるのよ」

易く否定する彼女

冷たくも見惚れる笑顔、これが平時であったなら、誰もが悔やむだろう

ゆつくりとマグカップを置いた

「まず、その男と何故私の顔が同じなのでしょうね？」

単刀直入

その侵入者の彼女と同じ顔、しかし髪色は銀髪だ

「んふふ、コイツが…？」

冷静な彼は吹き出すのを抑えたが笑いが漏れた

「何が可笑しいのかしら？」

「では三つの点を上げよう」

彼は眼前に手を掲げた

ひとつ

中指を折る

「まず、コイツは性別の区別は無い」

ふたつ

薬指

「彼は君をまねたのではなく、キミが似ているだけさ」

人差し指を伸ばし

『彼』を指す

「そして、みつつ、”現在の地球上、近隣の星々の生命体の括りには収まらない”のさ」

親指を折った二つの指に付け、キツネのポーズ

周りの機器は盛大な稼働音を挙げた

『シーケンス繰り上げ、確認 99%』

一瞬にして胸を貫かれた調整員は苦しそうに喘ぎながら最後に告げる

「これは、こいつは、『レイセン』：お前の…のっ…」

吐血し息絶えた

刃を振り払い骸を壁に薙げる。血のシミが壁一面に広がった

施術室を見やると

起き上がった彼と目が合い

その純粋な金色の瞳で首を傾げた

「地盤沈下は然程酷く無いわね」

「んー？」

ハンガーに掛けてあつた白衣を着せた未熟な身体の『レイセン』

「気にしなくていいわ…キミは今日から弟だもの」

家族なんだから、と微笑む彼女『姉』は

仲の良い本当の家族のように

然も自然に活発で新鮮な死体や生物兵器が闊歩する都心へ向かっていった

彼女たちを青い月が照らしていた

『弟君、私の名前はね』

手をつないだ月夜の廃墟から

今やカートの上の人

「夕方になったねえ」

「う。」

あれから歩き続けて、『ヒトだった者』あふれる住宅街をスラスラ抜け
突き当りに現れた湖畔を半周すれば拠点に到着というところで

「この紙に書いてある薬剤だと…肥料…で大丈夫なの？」

「う。」

肯く彼女に救出した本人は恐る恐る尋ねるがやはり拙い
彼女は自分たちと同じ如何に見ても人間だ

「ホームセンター…寄ろっか」

「ん」

カートを押す彼女はそういえば、と名前を聞く

「ん。」

「零…レイ？」

「ゼロ」

「変わった名前だね」

「私はね『犬養 ゆい』つて言います」

よろしくね

「…妹ちゃんっ！」

零は目を見開いた

なんとなく感じたのか彼女は

「家族なんだから当然でしょ？」

感じる筈のない既視感に涙が頬を伝った